

## 論文内容要旨

現在歯数と基本チェックリストから把握できるカテゴリー別の  
機能維持レベルとの関連

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

口腔衛生学講座 中向井 政子

(指導： 荒川 浩久 教授)

## 論文内容要旨

高齢になると要介護者が増加し、現在歯数が減少することが知られているが、介護予防の二次予防事業対象者把握に用いられている厚生労働省の基本チェックリストには現在歯数は含まれていない。また、基本チェックリストで把握できる生活機能や現在歯数は、年齢と交絡することが想像される。そこで高齢者の現在歯数と基本チェックリストの回答との関連を分析し、高齢になっても歯が多数残ることの重要性を検証することを目的に、沼津市が65歳以上の市民を対象に実施した「沼津市介護予防基本チェックリスト調査」の分析を行った。

分析対象者は25,943名（男性12,007名、女性13,936名）であった。「沼津市版介護予防基本チェックリスト」は、厚生労働省による25項目の基本チェックリストと、沼津市が独自に追加した家族構成、現在歯数階級（0歯、1～9歯、10～19歯、20歯以上）の自己申告、病气入院の経験や運動状況などの9項目から構成されている。厚生労働省の基本チェックリストは「問1～5：日常生活関連動作」、「問6～10：運動器の機能」、「問11と身長・体重：低栄養状態」、「問12～14：口腔機能」、「問15～16：閉じこもり」、「問17～19：認知症」、「問20～24：うつ」である。分析に用いた項目は、25項目の基本チェックリストと性別、年齢および沼津市が独自に追加した現在歯数階級である。まず現在歯数階級別の年齢と7項目のカテゴリ一点数の平均値の差の検定（分散分析後に多重比較）を行った。また、年齢による交絡を除くために65歳から5歳刻みで層化を行い、現在歯数階級別の各カテゴリの平均点数を求めた。さらに重回帰分析（強制投入法）によって、各カテゴリ一点数に対する現在歯数と年齢の影響を分析した。

その結果、現在歯数が少なくなるにつれて、各カテゴリの平均点数は有意に上昇した。現在歯数階級別の各カテゴリの平均点数は、低栄養状態の0歯と1～9歯間を除くすべての階級間で有意差があり、歯数が少なくなるにつれて平均点数が上昇する、すなわち体の状態が悪くなる傾向が認められた。しかし、「低栄養状態」と「認知症」に関しては、その差は大きくなかった。年齢により層化した結果においては、各カテゴリの平均点数の差が少なくなるカテゴリもあったが、ほぼ同様の結果がみられた。重回帰分析の結果では、「運動器の機能」の調整済み決定係数が最も大きかったが、その値は0.13であり、モデルの説明程度は小さいものであった。各カテゴリの標準化偏回帰係数から年齢の影響が大きいと判断されたが、現在歯数が影響しているカテゴリ（「日常生活機能」、「運動器の機能」、「閉じこもり」）もあった。以上のことから、基本チェックリスト票から把握できる生活状態や機能には、年齢による影響が最も大きい、自分の歯を多く有する者は「日常生活機能」、「運動器の機能」、「閉じこもり」のような機能や生活状態が高く維持されていることが示され、歯の喪失を防ぐことの重要性が改めて示唆された。